

～日置町の歴史探訪 ⑦～

豊前坊



1997.10.16 M.yamasaki

日置の特殊な民俗行事として豊前坊信仰がある（現在は大方消滅している）。近郷市町村には見られない然も日置上、中地域に限られていて、風土注進案には次の記述がある。「豊前坊と申候て村々の山峯に松木森を立、彦山権現と勤請仕り、牛馬安全の為毎年六月二十九日の夜松明を奉献申候、いづれも天明寛政頃（一七八一〜一八〇一年）豊前国（福岡県東部）の彦山か求菩提山の山岳修験道の山伏がこの地方に止まり修験道教団の布教と合せ呪術的な事を行ったのではと推測される。では近年までどのような祭りが施行されたのか日置下区域を除き坂本、一円、狩宿や北陵、南部地域の十七ヶ所の集落にあって各所の山頂の石祠に祀られている。毎年六月二十九日村人が松明をたき、牛馬安全と五穀豊穰を祈願する。又早天時にあつては雨乞いの為千把焚と言つて各集落毎に松明を携えて豊前坊に向い一斉に点火して降雨を祈願するのである。

古来、特定の山岳が崇拜の対象となつて山岳信仰（原始宗教）が発展し神社となり又佛教と融合して宮寺となつて

いる。

彦山（太郎坊）も寺号を霊山寺といひ求菩提山（次郎坊）は護国寺と言つてゐる。ではそこに組する修験者（山伏）は如何なる布教活動を展開したのらうか。山伏は天狗を連想（中国の流星占い）させ火防の術、水源の神を語り加持祈禱をして悪霊除いや経塚供養をする。彦山は海拔一、二〇〇メートルの中腹に位置する所に壮大な門前町があつて往時は三千八百坊、山伏俗人が三千人いたという。彼らは厳しい荒修行（峯入修行、修行窟という岩窟に籠居してひたすら経文を誦誦し佛果を待つ）を経て九州各地（含長門国）へ長期の布教の旅へ出ている。そして檀那と称する信者を得たり神札を配布したりそれを基本的な収入源としていたのである。各地に散つた修験僧達の記録によると最大一万三千軒、少ない者で五十軒の檀那を教化している。平均二百軒として年間各戸を訪問し仮りに一軒当り米一升布施を得たとして二石あつたと見てよい。又彦山に來泊する者の布施や主要祭礼執行、祈禱に際する特別収入が全山の資金調達となつた。然し中には布施を求めて各地に散つ

た修験僧も再び帰山しない者もいたようである（求菩提山資料館長談）。現に山伏集団の中に多くの檀那を持たない為貧富の差が著しく宗教的にも社会的にも大きな歪を生じ幕末には祭役や檀那廻りを捨てて長州藩の奇兵隊に走る山伏や小倉藩に組して対峙する者もいたようである。

さて、日置を訪れた修験僧は如何なる布教を試みたであらうか推測する以外に何もない。前述のように恐らく呪術的な行為で人心を捕らえ例え加持祈禱の念力を持つて司雨的な主宰者になったり、牛馬安全を願ひ五穀豊穰の祈禱を随所の山頂で行つたのである。長門部では豊田町で若干見ることが出来るが豊前坊については幕末の萩城下見聞録にも記述されていない。

今の農業は牛馬を必要としない。曾ては牛馬こそ農民にとつては命である。豊前坊は農民の心情そのままに永々と続いて来た安らぎの行事でもあつたのである。

執筆 岡藤 正作

